現地公開資料（2007/1006）

私部南遺跡（その２）発掘調査現地公開資料

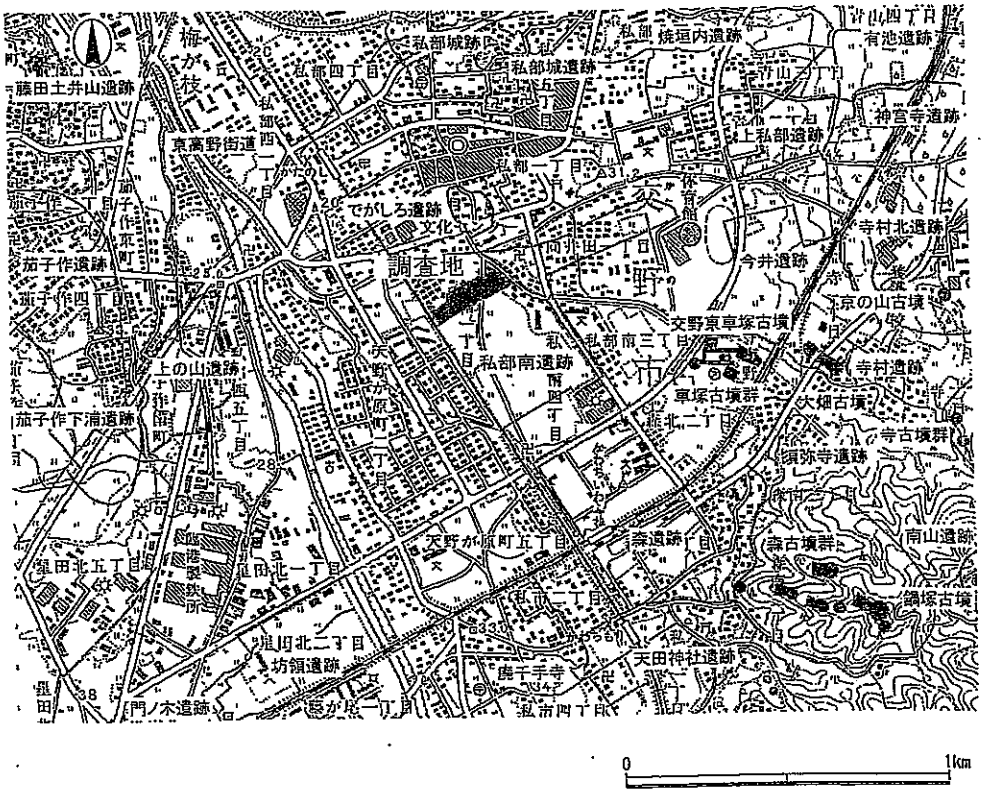
財団法人　大阪府文化財センター

はじめに

当センターでは、第二京阪道路の建設に先立ち、私部南遺跡の範囲の西端に当たる京阪電鉄交野線から前川までの範囲を（その２）として、平成１８年８月から発掘調査を実施しています。これまでに道路建設予定地の内、南北両側に沿った側道建設予定地部分及び高速道路部分の橋脚建設予定部分の一部に当たる第１調査区～第７調査区について調査を終了し、現在、それ以外の橋脚建設予定部分について、順次、発掘調査を進めています。これまでにも本年１月２０日に第１調査区の現地説明会を、また５月９日には第３調査区の現地公開を、さらに７月７日に第５調査区～第７調査区の現地公開を実施ししてまいりましたが、第８調査区・第９調査区についても遺構の内容が明らかになってまいりましたので、現地を公開しその成果を広く公表するものです。

これまでの調査成果の概要

これまでの調査では、現地表下 0.5～0.6m付近で中世の耕作面がほぼ全面に広がっていることが確認されたほか、さらにその下層に縄文時代中期末から平安時代にかけての遺構が同一面で重複して遺存することが明らかになってきました。



私部南遺跡とその周辺の遺跡

縄文時代については、中期末から後期初頭にかけての土器が若干認められるほか、第１調査区では土器を伴う土坑や深鉢片を底部に敷き詰めた袋状土坑が検出されました。遺存する遺構は少ないものの当該時期にも集落が営まれていたことが窺われる貴重な成果と言えます。

弥生時代については、前期末から中期前半の遺構・遺物が各調査区で散見されます。第１調査区で検出された大型円形住居は３回以上にわたって少しずつ位置をずらして建替えられており、この付近を中心にこの辺りの拠点的な集落が営まれていたことが解りました。周囲には壷の口縁を打欠き底部を上にして逆さまにして埋納したピットや、無頸壷を底部に据えた大型の土坑など、なんらかの意味合いをもって営まれた遺構が多くみられます。従って、弥生時代の集落は第１調査区を中心に調査区北側にかけて展開するものと見られます。その南側に当たる第６調査区では、東西に主軸を置く木棺墓が列を成して検出され、集落の南縁を示す可能性があります。それ以外の調査区では弥生時代の遺構は希薄となり、人為性に乏しい落込みが弥生土器と共に埋没した状況が散見されます。

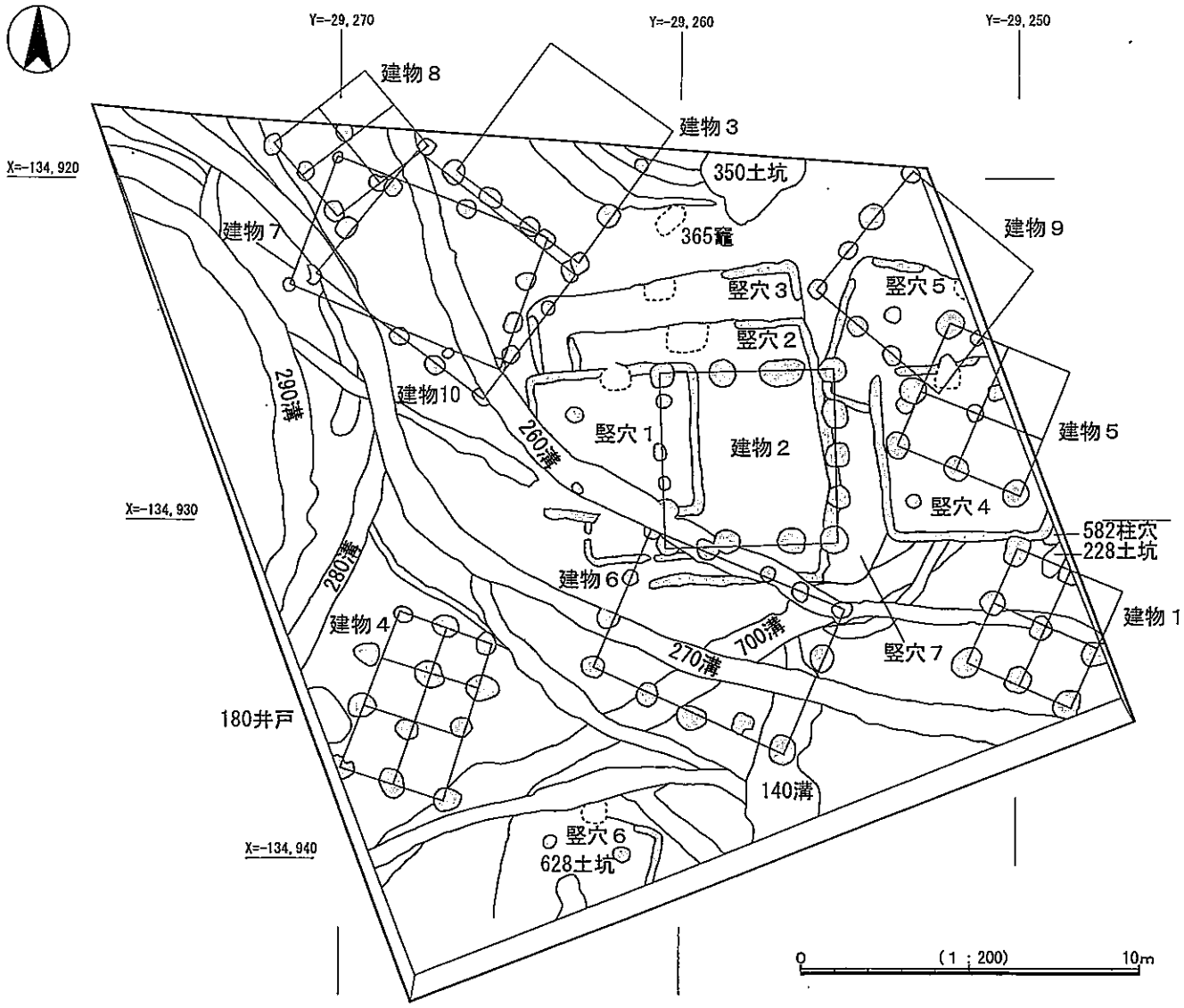
弥生時代の集落が廃絶して数百年の時間を隔て古墳時代後期には再び大規模な集落が営まれていました。第７調査区から第３調査区に向け前川から天野川の氾濫原を結ぶ深い「Ｖ」字形の溝の開削により古墳時代の営みが始まります。この溝は比較的短期間で埋められ、それに続いて第１調査区・第３調査区などで方形の竪穴住居が営まれはじめ、その後、６世紀には次第に掘立柱建物へ移行していった様子が窺われます。この他に各調査区をまたいで縦横に溝が開削され、それらが複雑に分岐や合流、或いは人為的に埋められ切り替えられた状況が数多く確認されました。また大型の土坑が第１調査区から第５調査区及び第３調査区で検出され、溝の人為的に埋められた部分などとともに焼成不良や焼け歪みが顕著な須恵器が数多く出土しました。こうした状況から、近隣には須恵器窯の存在が想定され、この集落が須恵器生産に関わっていた可能性を色濃く示していると考えられます。

第３調査区南西部では、隅丸方形でやや大きな掘り方を有する柱穴で構成される掘立柱建物が検出されています。柱の抜取り穴に口縁を打ち欠いた奈良時代の大型の杯を埋納したり、金銅製の帯金具が出土するなど、注目すべき遺構・遺物が発見されました。この第３調査区南西部と第７調査区では、さらに平安時代の黒色土器やそれに続く中世の瓦器を伴う掘立柱建物などの遺構も検出されています。

こうした集落の変遷を経た後、室町時代（１４世紀頃）には調査区一帯はほぼ全面にわたって耕地として開発され、近年に至るまでほぼ同様の土地利用がなされてきたことが明らかになりました。

今回、現地公開を行います第８調査区・第９調査区につきましても、これまでの調査成果を裏付けるとともに、新たな様々な成果を得ることができました。

また、これまでの調査で弥生時代・古墳時代の集落跡が営まれた扇状地突端の台地状の区域については、道路建設に係る発掘調査をほぼ完了することとなります。現在も順次着手しておりますが、今後はこうした成果を踏まえ新たに発見された集落跡の縁辺部の状況や周辺の地形の状況などについても引き続き調査を行う予定です。



第８調査区　遺構平面図

＜第８調査区＞

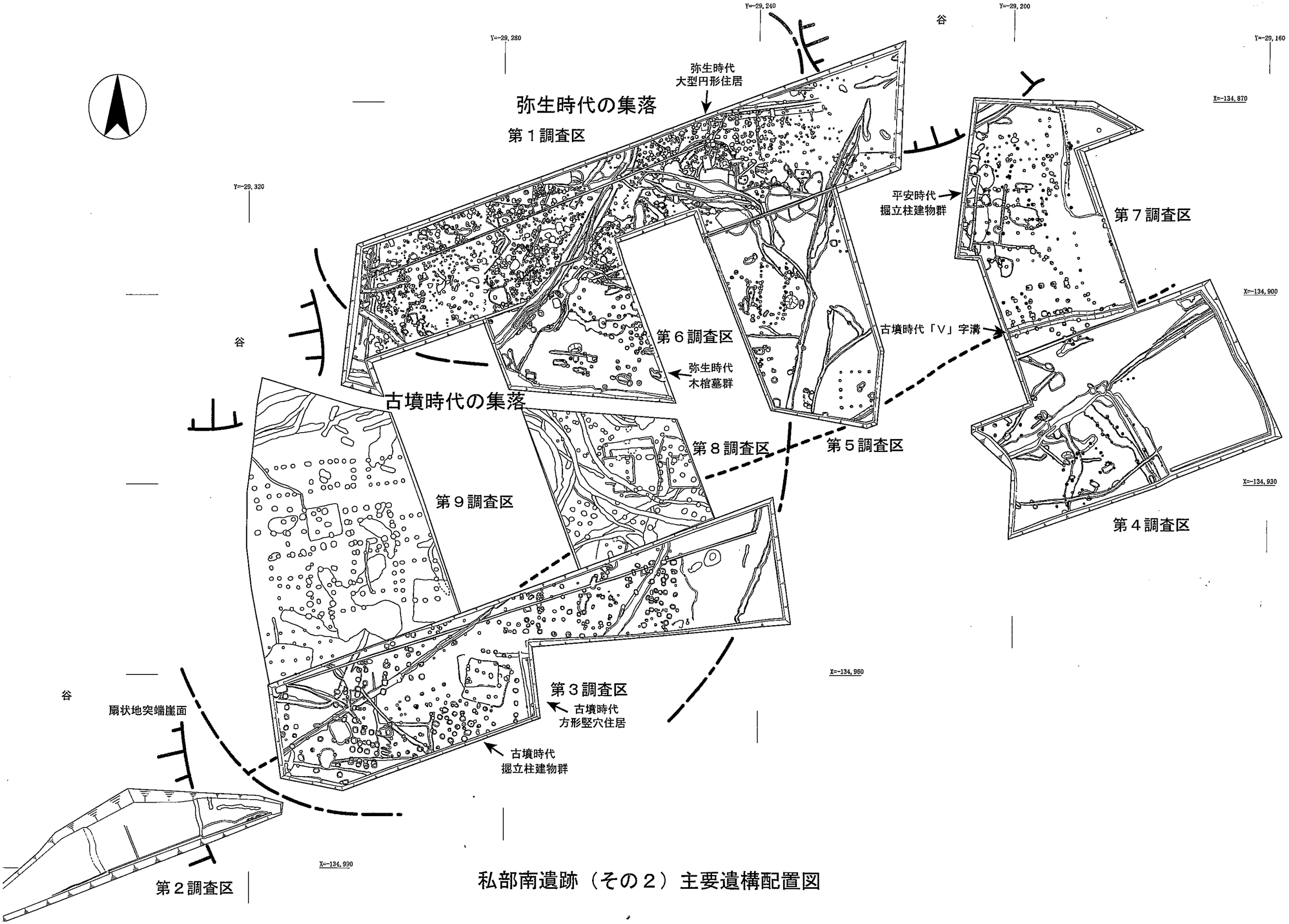
当調査区では弥生時代～古墳時代の遺構を確認しました。

弥生時代の遺構としては、溝や土坑、柱穴などがあります。628 土坑や 582 柱穴からは弥生時代前期末～中期前半の壺や甕が出土しました。

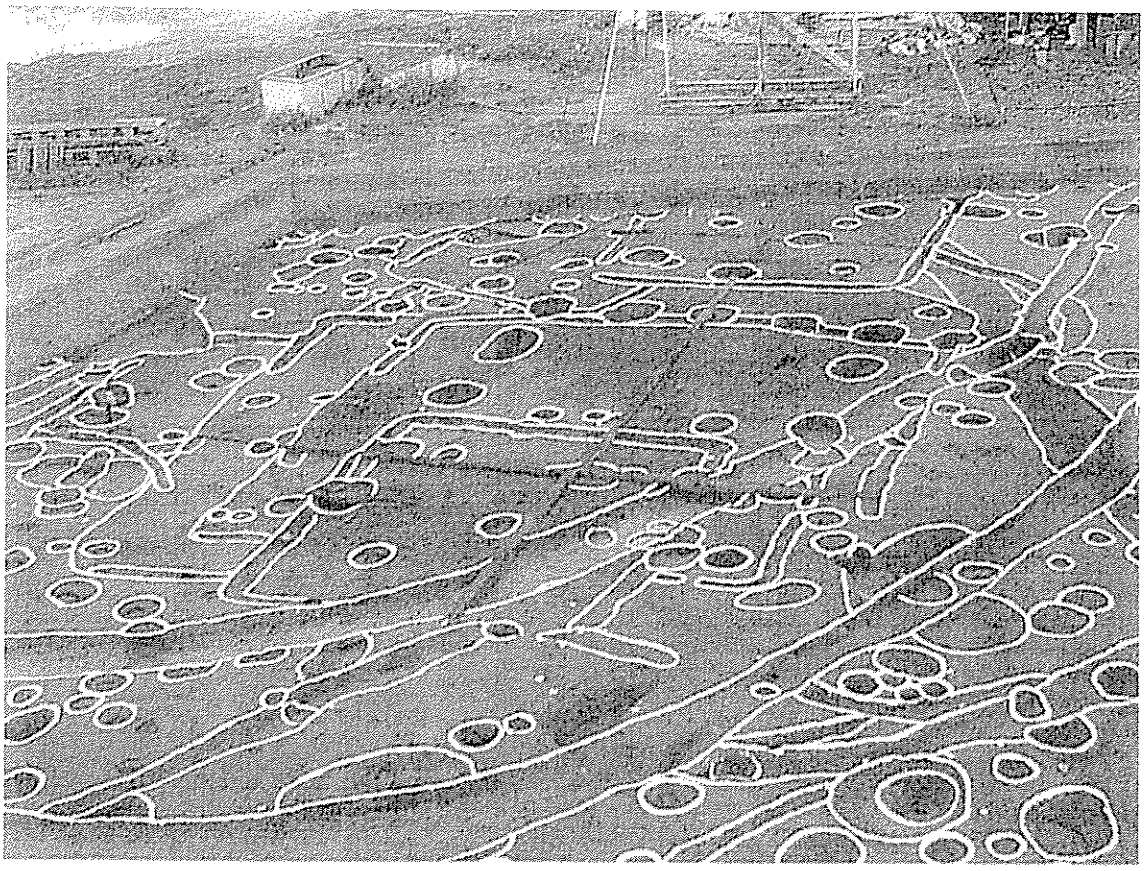
古墳時代の遺構では、竪穴住居や掘立柱建物、溝、井戸、土坑、柱穴などを検出しました。調査区を東西方向に横断する 700 溝は、幅・深さともに約１m を測り、断面形は深い「V」字状を呈しています。この溝は第３調査区から第５・第７調査区に続いており、現在のところ、全長 155m以上に及ぶことがわかりました。

700 溝が埋まった後、当調査区では竪穴住居（竪穴住居１～７）が建てられるようになりました。これらの竪穴住居が折り重なった状態で検出できたことから、同じ地に何度も建て替えられていたことがわかります。いずれの住居も平面形が方形を呈し、住居の北辺中央には竈を築いていました。竈からは土師器の壺が据えられた状態で出土しているものもあります（竪穴住居２・４・６）。竪穴住居廃絶後には、掘立柱建物が建てられるようになりました（建物 1～10）。中には柱穴の深さが約 0.8m を測る建物もあります（建物１）。これら建物も廃れた後に、260 溝や 270 溝などの溝が掘られたものと思われます。

以上のように当調査区でも、特に古墳時代において、集落が営まれていた様子を窺うことができました。



私部南遺跡（その２）主要遺構配置図



第８調査区　古墳時代　方形竪穴住居

＜第９調査区＞

当調査区では、弥生時代～平安時代の遺構を確認しました。

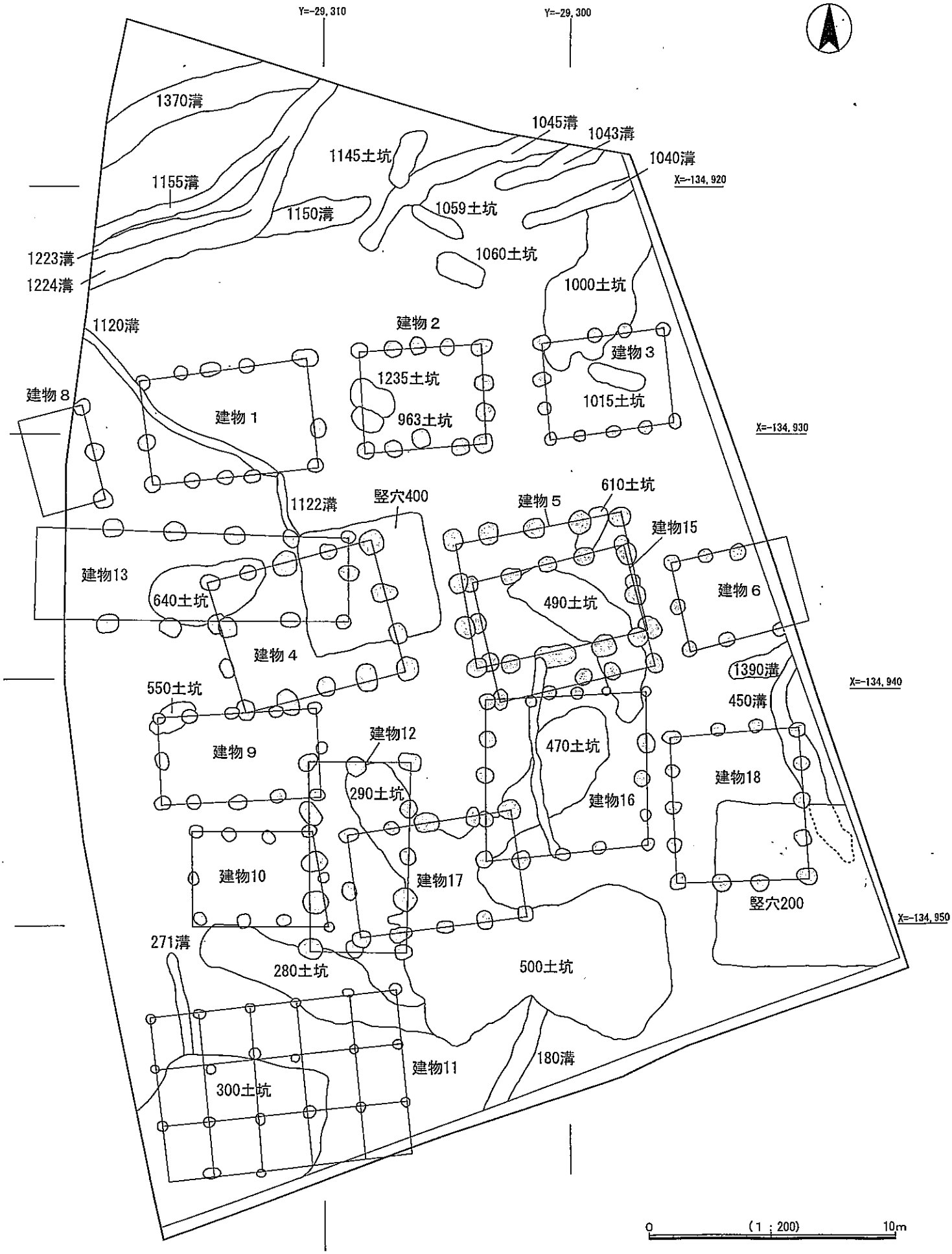
弥生時代の遺構としては、溝と土坑があります。1059 土坑・280 土坑・1000 土坑からは弥生時代前期末～中期初頭の壺・甕・石器が出土しました。

古墳時代の遺構は、竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑・柱穴などがあります。調査区北側には 1370 溝・1155 溝・1223 溝・1224 溝が掘削されています。調査区北側は、台地の縁辺部に位置しており、集落内からの排水を目的として掘られたと考えられます。

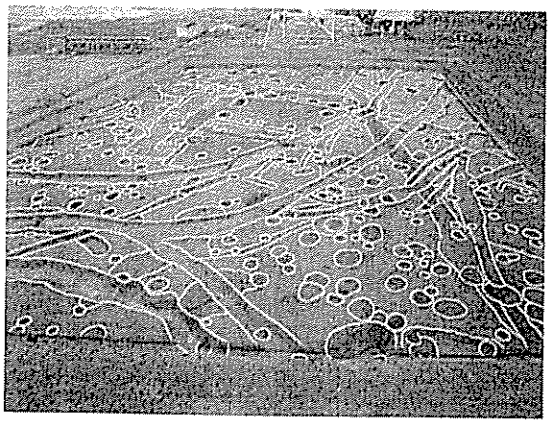
竪穴住居は調査区中央と南東で検出されました。400 竪穴住居では平面形が方形を呈し、北辺中央に竈を築いていました。

竪穴住居廃絶後には、掘立柱建物が建てられました（建物１～18)。建物１～３と建物４～６の間には空間地が存在し、通行路として利用されていたと考えられます。建物 11 は、３間×５間の総柱建物で、倉庫と考えられます。同様の建物を第３調査区でも検出しており、平安時代の建物であると考えられます。そのほかの建物の時期は、出土している土器が細片であったため、はっきりとした時期はわかりませんが、古墳時代後期～平安時代にかけて、連綿と建てられたことがわかりました。

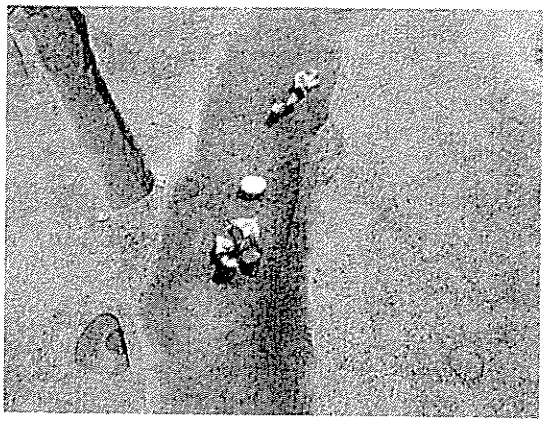
また当調査区からは、平安時代初期の円面硯と呼ばれる硯が出土しています。以前に調査を行った第３調査区からは帯金具が出土しており、文字を書いたりする官人が居住していたことがわかりました。


Y=-29,310
Y=-29,300
X=-134,920
X=-134,930
X=-134,940
X=-134,950
1370溝
1045溝
1043溝
1040溝
1145土坑
1155溝
1150溝
1059土坑
1060土坑
1223溝
1224溝
1000土坑
1120溝
建物２
建物３
1235土坑
1015土坑
建物８
建物１
963土坑
610土坑
1122溝
竪穴400
建物５
建物15
建物13
640土坑
490土坑
建物６
建物４
1390溝
550土坑
450溝
建物12
470土坑
建物９
建物18
290土坑
建物16
建物10
建物17
竪穴200
271溝
280土坑
500土坑
180溝
建物11
300土坑
0
(1：200)
10m

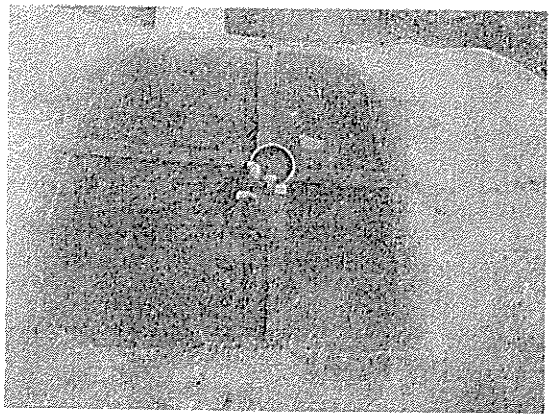
第９調査区　遺構平面図



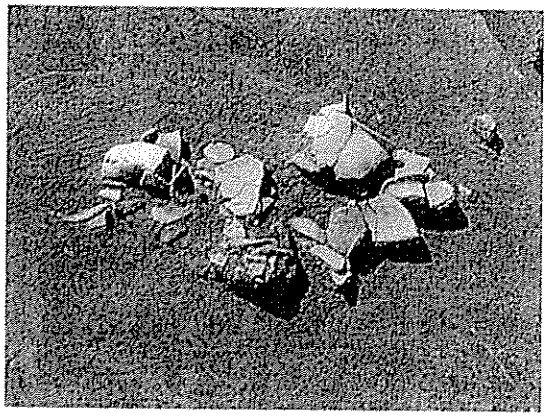
第８調査区全景（西から）



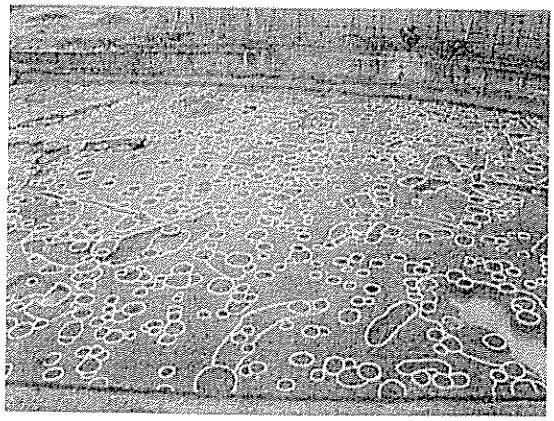
第８調査区　古墳時代溝　遺物出土状況



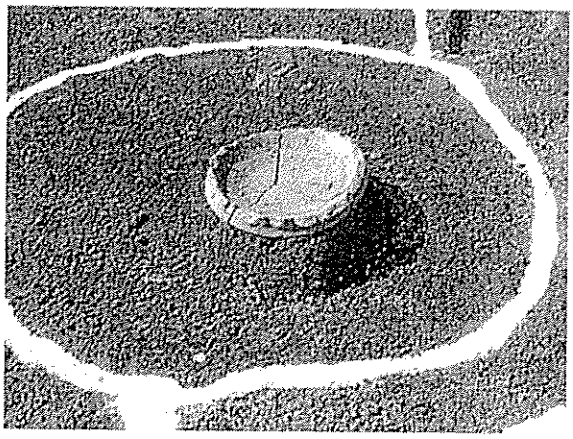
第８調査区　古墳時代竪穴住居内　竈



第８調査区　古墳時代竈遺物出土状況



第９調査区　中央部　全景（東から）



第９調査区　円面硯出土状況